

25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
時計 の中に まだ点滅 してゐる 鳥は	断食月 （ラマ ダン）や 椅子流れ ゆく下水 道	嘴打ちの 卵暮春の 心臓は	蟻溺れて 千葉のウ ヰスキイ 啄木忌	電球の錆 びはじめ だす春の 風邪	須弥壇に 座れる手 中には朧	ヒヤシン ス雨の速 さで組み 上る	小説の字 を焼く蝶 の触角が	ムスカリ の罅割れ てゐて永 遠に春	俎板の傷 の奥には 蜺の眼	自分にも 中指見せ てゐる暮 春	春はあけ ぼの犬の 前世を繰 り返し	リモコン や晴れて 蛙の群死 体	春暑し吐 き気は眼 窩へと集 ふ	眠りかた を毎夜忘 れてしま ふよ董	○●○● に謝つて ゐる子供 たち	時計の針 がセダム のやうに 垂れてゐ る	母校燃や す煙よ凧 と軋みつ つ	春震へつ つ紙きれ を並べ置 く	i T u n e s カード 干潟に汚 れてをり	蜂の巣は 滴りとい ふ落とし もの	太陽の蜂 黒点で踊 るかな	残雪の抽 出といふ 轍かな	墓出でて 世界ふた たび哀し くなる	揮発して オーロラ となる蛙 かな

50	49	48	47	46	45	44	43	42	41	40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	26
枕元 にミン テイア の散ら ばつて ゐる溽 暑	うつ伏 せに寝 る裸の くらく く似指	羽蟻唸 る丑三 つ時の トラン プに	アイス テイー かき混 ぜ透明 な蛭が	空蟬に 慄く昼 月藍を 宿す	冷奴の 乾いて みる仏 間かな	茄子消 えて机 の残る 四畳半	蛭蝻む さぼる 雨に重 たき成 人誌	太陽の 綻びる やう日 焼け剥 く	梅干や 耳を離 れぬ昨 夜の経	見えぬ 手に掴 まれて をる海 月かな	蛾を食 へば葉 擦れの 響く兄 の中	黒蝶の 腹ぬる ぬると つまみ きれず	二つ目 の宇宙 コーラ がもと もある	E x c e l のセル 食ふ紙 魚や厨 子仏	賞状を 輪ゴム で縛る 梅雨か な	切り株 の古代 を思ふ 雀蜂	読経の 幻聴四 葩の奥 に四葩 枯れ	湯煙が ちぎつ て落と す暑さ かな	ふつふ つとエ キノプ ス燃え きれいな 郊外	独白や 薔薇の 起源を たとふ れば	電車に 揺られ るとき 滝壺を 思ふ	燻製の 蛾の舐 めてゐ る天衣 かな	野苺の 中にて 鍵のや うに芯	吊るさ れて裁 判の香 の墓

75	74	73	72	71	70	69	68	67	66	65	64	63	62	61	60	59	58	57	56	55	54	53	52	51
手袋が鼠のやうに唄ひゐる	肥える生活へくらしよ我が家は冬眠の洞	納豆や詩を捏ねくれば軽い脳	空港の花瓶の曇る潮騒忌	日焼けしてゐないところから枯れてくる	死に水の乾きし腕に亀匂ふ	猿の掌がひらく夜霧に樹が灯る	閉秋の雨の昇降機は眠い	枝豆の電子レンジに捻れる音	檸檬まぶしカフェのやはらかすぎる椅子	秋思から外されてゐる動悸かな	紙礫の中の星屑ラ・フランス	火の中に裾濃の炎癩禁忌	夜長ふとシーラカンス電柱の中	電球を舐めて浮遊の秋金魚	カフェインの錠剤落ちてゐる墓参	桃落ちて雨の木陰のいきれをり	内側に栖む鹿が舐め脹脛	さやうなら産湯が言葉だらけの光を溢す	膀胱に小鳥を呼んでゐる夜明け	海峡を抜け泳ぎゆく山羊の幻覚	泣きすぎで老夫にフライドポテトの香	ぐつだりとしてパワードめく孔雀	火酒叩くなづきの部屋の壁を一つづつ	下闇につるぶ犬猫やがては蠟

100	99	98	97	96	95	94	93	92	91	90	89	88	87	86	85	84	83	82	81	80	79	78	77	76
裏返されて急に冷たくなるのは死体も一緒	橋の裏で浴室全体が凍つてゐる	雪国のひとつは滅びをる地平	私群来私の中の氷塊に	煙草窩に冬日がちやうどよく填る	エレモフイラにぐぢやぐぢやの羽の痕跡器	まへがみの生えぎはの熱草城忌	ブロッコリー畑不溶の書を焚けり	水晶かあるいはキリンの氷る糞か	Z o m の背後に婚ぐ山羊たち無へ逆流	曼茶羅や独楽の重心腫れてをり	十字架や肺に残れる去年の息	枕の中の寒い湖面ゆ卵釣る	初夢の腹から生えてゐる蛇口	餅の中よりペンギンの生まれくる	化仏の中私の私よ Merry クリスマス	狐火の痰めけり墓前に聖書	蟹味噌の臭ふ枯木を洗ひけり	句碑のうらには木の根の瘤やアジアの鶴	闇汁のQのかたちのはりぱりす	ポインセチア置くだけでもう異質な部屋だ	着ぶくれてゐて胸焼けに鬱なる芯	大地讃頌鳥籠揺れ止めば氷る	鉄製の墓碑聳え立つ火事見舞	心弁に綿虫が流れくる真昼